

台密西山流——成菩提院灌室の成立について

尾 上 寛 仲

一

台密諸流の一つに西山流があり、上杉文秀博士の「日本天台史」では台密十三流の中に入れ、^①裕慈弘師の「天台宗史概説」では十三流の中に数えていない。^②西山流の祖は澄豪（一二六〇—一三五〇）で、此の流派の灌室は正覚院（比叡山東塔）正観院（同西塔）宝菩提院（京都）成菩提院（滋賀県）にあつた。金剛輪寺（滋賀県）には西山流九祖の画像が伝えられ、それに依れば承澄（一二〇五—一二八二）澄豪（一二六〇—一三五〇）豪鎮（一三〇九—一三七二）嚴豪（一三五〇—一四一六）豪善（一一四五〇）豪宗（一一三九—一四七二）豪恵（一四二七—一四八九）豪憲（一四三二—一五〇〇）豪祝（一一五一〇）が西山流の直系とされて居る。且つ金剛輪寺蔵の豪鎮画像の賛には延慶二年（一一三〇）己酉十月十日誕生、十二歳而始登叡岳、十四出家受戒十九、和尚臨遷化之時鑒膺運之機、為六太之正統、以小河之嫡流、付属伝授畢、四十八而始授職位、六十四歲入滅、于時応安五年（一一三三）壬子九月九日寅時。

とあつて、豪鎮は穴太流の正統のため且つ小川の嫡流の故を以て伝授をうけたとして居る。蓋し小川法印忠快より始る。忠快の資が承澄であり、小川流の名称は忠快、承澄の住坊小川御殿に起因するが、元来は穴太流を受け継いでいた。西山流の名称は澄豪が宝菩提院に住し西山上人とも云われたように京都の西山の称呼に基くのであるが、これは後世斯く名けられたもので、西山流の初祖澄豪は勿論、其の資豪鎮すら穴太の正統、小川の嫡流を以て自任していたと云うべきである。澄豪の師承澄は穴太流の名称を用いて居ることが「阿婆縛抄許可略作法」の識語に見られる。即ち穴太流を相承した旨を述べ、

自今以後、穴太流中、有希望之輩者、早可授之。

と書いて居る。これに就き成菩提院蔵の西山流「許可密印」に其の伝承次第を示す記録がある。

(1) 於穴太御房賜御本書写畢 金剛仏子契中。

(2) 寿永元年（一一八二）十二月廿六日 賜師御本書写畢 金

剛仏子忠快。

(3) 嘉祿三年(一二二七)二月十一日 以師御本書写畢 金剛

仏子承澄。

(4) 弘安三年(一二八〇)十二月十三日 賜御本書写畢 金剛

仏子澄豪。

(5) 嘉暦元年(一二三六)八月十五日 賜御本書写畢 豪鎮

法印。

(6) 貞治六年(一二六七)十月廿七日 賜御本書写畢 嚴豪

法印。

(7) 至徳元年(一二八四)八月七日 賜御本書写畢 金剛仏子

豪喜。

(8) 応永廿三年(一四一六)九月十七日 賜御本書写畢 金剛

仏子豪宗。

(9) 文安二年(一四四五)十二月二日 賜御本書写畢 金剛仏

子豪恵。

(10) 宝徳元年(一四四九)正月廿四日 賜御本書写畢 金剛仏

子豪憲。

(11) 文明元年(一四七八)十月十五日 賜御本書写畢 金剛仏

子豪祝。

(12) 文明十年(一四七八)四月十二日 賜御本書写畢 金剛仏

子豪宣。

(13) 享祿四年(一五三一)五月七日 賜御本書写畢 金剛仏子

憲永。

(14) 天文廿一年(一五五二)十一月十六日 賜御本書写畢 金

剛仏子真祐。

ここに示された書写年月日は即ち「許可密印」の相承期日であり、最初の「穴太御房」は穴太流初祖の聖昭のことである。因に最後にある金剛仏子真祐は後に成菩提院の学頭(第十七世)になった真祐僧正である。

成菩提院灌室の成立に何等かのつながりの求められるのが「阿婆縛抄現在目録」の次の識語である。

亨徳元年(一四五二)申潤八月十七日丁未故慶舜法印御発願書写阿婆縛抄、悉以春海僧都任持奉渡之畢。右抄者小川僧正御制作、為当流無雙之重書。然嘉会時到、令伝持之給。其以為難有矣。予又始中終致奉行。今亦依懇請、染三六十一歳之禿筆、銘二百余卷之題額。願也契弘通於星霜、宿却利生於竜花曉焉。

穴太末嗣小川嫡流法印權大僧都豪宗□

ここにも豪宗は西山流の名称を用いず、「穴太末嗣、小川嫡流」と称して居る。此の識語にある如く、成菩提院第二世の慶舜が阿婆縛抄の書写を西山宝菩提院の豪宗に依頼していたが、慶舜の生存中にはそれが完成しなかった。慶舜は永享十三年(一四四一)八月十九日に示寂して居り、阿婆婆抄書写の完成は享徳元年で、其の時の成菩提院は第三世の春海の時代

である。従つて完成した阿婆縛抄は蒙宗より春海に渡されたのである。

二

成菩提院の開山貞舜法印（一二三三—一四二二）は密教を円済から受けて居り、円済は西山流を継承して居る。これについて貞舜自筆の切紙が成菩提院に残つて居る。切紙は二通あつて、其の一の「瑜祇秘決」の末尾に「三部伝法阿闍梨位円済示」とあり、此の一行は円済の自署である。瑜祇秘決の伝授次第は、光宗、運海、貞済、円済、貞舜となつて居る。此の中、光宗と円済の伝授年代は判明しないが、他は識語により判明する。即ち

(1) 光宗遍照金剛記之。

(2) 元弘三年（一一三三）十月十七日 於金山院書写了金剛仏子運海記之。

(3) 延文四年（一二五九）正月廿二日 於江州倚山延寿寺令書写了金剛仏子貞済記之。

(4) 応永十四年（一四〇七）丁亥政月廿九日賜円——師御本書写記
金剛仏子貞舜記之。

とある。其の二の切紙は即位灌頂の密印を示したもので、これには「三部都法阿闍梨位円済示」の円済の自署がある。そして最後に

月輪殿 承澄 澄豪 行遍 慶盛 光宗 澄恵 運海

貞済 円済 貞舜
の伝授次第を書き込んで居る。更に次の伝承年月日を残して居る。

(1) 正和二年（一二三三）卯乙卯正月二日以吉日奉受畢 于時天晴吉祥行 遍記。

(2) 正和二年卯乙卯三月九日以吉日奉受了 于時天晴吉祥慶盛記

(3) 正和五年（一二三六）辰丙辰四月十一日以吉日奉受了 于時天晴吉祥 光宗記。

(4) 元徳二年（一二三〇）午庚庚午六月廿三日以吉日於金山院奉受了 于時天晴吉祥 澄恵記。

(5) 元徳二年午庚庚午十二月十八日以吉日奉受了 于時天晴吉祥 運海記。

(6) 延文四年（一二五九）亥己己亥二月一日以吉日奉受了 貞済記。

(7) 応永八年（一四〇二）巳辛辛巳三月七日以吉日奉受了 貞舜記。

即ち貞舜は応永八年と同十四年に円済から西山流の伝授をうけて居ることが明白である。其の所以は円済は澄豪の流を汲んで居るからである。

定珍の「日本大師先徳明匠記」には「杉生流相承次第」が収められ、其の中に貞海—貞済—貞祐—貞舜—能舜の系譜を

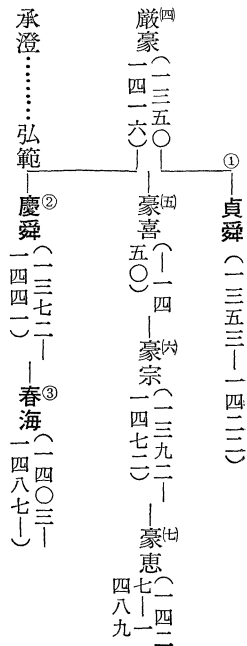
掲げて居る。これと同じ系譜が「天台法華宗牛頭法門要纂」にも見られる。即ち

貞海授貞濟。貞濟授貞祐。貞祐授貞舜。貞舜授能舜。⁽³⁾
とある。これは顯教の相承を示したものであるが、前述の「瑜祇秘決」の貞濟—円濟—貞舜と比較し、貞舜は顯密共に貞濟の孫弟子になる。貞濟は芝間談義所に居り、貞濟の灌頂の師運海は澄豪五代の法孫であるから、彼も亦西山流に属することになる。

三

成菩提院は柏原談義所として知られ、且つ西山流の灌室として続いた。「嚴豪の資に慶舜ありて江州柏原成菩提院灌室の祖となる」と島地大等師は「天台教學史」に記述されて居る。慶舜（一三七二—一四四一）が嚴豪から西山流を相承してことは成菩提院蔵の胎藏界印信により明白である。慶舜の印信は胎、金、合の三通が現存し何れも西山流のものであるが、嚴豪—慶舜の伝授は前記の如く胎藏界のみである。其の年代は応永廿二年（一四一五）九月廿一日である。嚴豪は其の翌年十月五日六十七歳で示寂したため、慶舜が金剛界、合行の阿闍梨灌頂法の伝付は嚴豪の資の豪喜より受けたのである。即ち金剛界印信は応永廿五年（一四一八）九月廿九日付、合行印信は応永廿九年（一四二二）十月朔日付で授与されて居る。そこで成菩提院灌室の阿闍梨のつながりを示すと次の如

くになる。



（算用数字は成菩提院歴代漢字数字は西山九祖の順）

ここで問題となるのは嚴豪の資に貞舜のあることである。成菩提院に「天台円頓仏性戒相承血脉譜」の板木が現存し、それには嚴豪法印の次に貞舜法印を並べて居る。今少し之を遡れば、承澄僧正—伝法和尚—豪鎮法印—嚴豪法印の相承を書き列ねて居る。ここに云う伝法和尚は澄豪のことである。即ち成菩提院では承澄—澄豪—豪鎮—嚴豪—貞舜の相承を認めて来たのである。そして此れは明かに西山流の系譜と一致するのである。

次に弘範が慶舜の灌頂の師であることは、応永七年（一四〇〇）六月十一日灌頂阿闍梨法印弘範^示の弘範自署の金剛界印信が成菩提院に伝えられて居ることに依り之を知るのである。此の印信による次第は忠快—承澄—永慶—貞存—弘範—慶舜となる。然し慶舜が金剛界を豪喜からも受けたこと

は前述した通りである。

慶舜について成菩提院第三世となつた春海は胎藏界を慶舜より授けられて居る。その胎藏界印信の末尾には

方今、為令^レ不断^ニ絶師跡^一、以此胎藏大教主及阿闍梨灌頂法、
伝付大法師春海^ニ訖。尽授三昧耶戒^ニ夜入^ニ灌頂道場^一、即得^ニ毗盧遮那如来号遍照金剛^一、所願秘教遠布、福利群生、法眼遍照、俱登^ニ極位^一、応永卅一年（一四二四）^{歲次 甲辰}十一月十九日、伝授三部灌頂阿闍梨權少僧都法眼和尚位慶舜^示

とある。此の印信最後の「慶舜^示」は慶舜の自筆である。成菩提院では既に応永廿九年（一四二二）七月朔日慶舜は示寂して居るので、慶舜より春海に胎藏界を伝えた灌頂道場は成菩提院の灌室であることは云うまでもない。

春海は木原談義所の開祖稟海の弟子であり、此の頃成菩提院に於いて顕密の学を慶舜に就いて学んでいた。成菩提院の寂照藏に絹本着色胎藏界及び金剛界曼荼羅の両図が収められて居るが、これは寛正三年（一四六二）開眼され、其の導師は春海であつた。此の両界曼荼羅図は美濃国安八郡平野庄西保の円乗院の常什物であつたが、天文十四年（一五四五）成菩提院に寄進されて居る。成菩提院の春海が美濃国に於いて両界曼荼羅の開眼導師を勤めたことは、成菩提院灌室の法流末寺が既に美濃国に固定していたことになる。

成菩提院の末寺關係に就き古文書は殆んど残つて居らず、

詳かにし得ないが、「院中代々法度之事」の第十三条に

諸末寺諸山之衆、年中礼物等之事、大略漸々返し畢。然共、実成院、花藏院、円光院、成就院、正覺院、定光院、鷲田正覺院、宝伝寺、此八ヶ寺者末寺契約也（中略）此等之住持等退転之時者、必從^ニ当院^一宛定可有之故也。（以下略）

とあつて、此等の末寺は美濃国にあつた。成菩提院は近江国にあるので末寺が近江国に散在することは勿論であるが、早くから美濃国にもあつたのである。それは成菩提院が談義所であつたので、其の方面から本末關係が生じましたが、一方では西山流の灌室のため、灌頂を通じて本末關係が確立したことも否定出来ない。

1 同書附録の表による。

2 一六七頁—一六八頁

3 伝教大師全集第五卷 六八頁 但し全集は舜貞になつて居るが、これは貞舜の誤。

4 美濃国安八郡芝間にあつた。

5 四〇九頁

6 元禄時代の開板であるが、貞舜法印以来の成菩提院の世代譜を示して居る。

7 九州肥後。熊本県下益城郡富合町木原長寿寺。

8 四教顕略鈔上（真如藏一五四）

9 大永初年（一五二二）頃の成立。